

ユニバーサルデザインについて

ユニバーサルデザインとは

ユニバーサルデザインは、1980年代、アメリカの建築家であり、ノースカロライナ州立大学ユニバーサルデザインセンター所長であった故ロナルド・メイス氏により提唱され、「特別な製品や調整無しで、最大限可能な限り、すべての人々に利用しやすい製品やサービス、環境をデザインすること」と定義されている。

年齢、性別、国籍、文化、身体的能力や状態といった人の様々な特性や違いを超え、あらゆる人に優しいモノづくり、生活環境・社会づくりを行っていかこうとする考え方のことを言う。

バリアフリーとの違い

・ バリアフリー

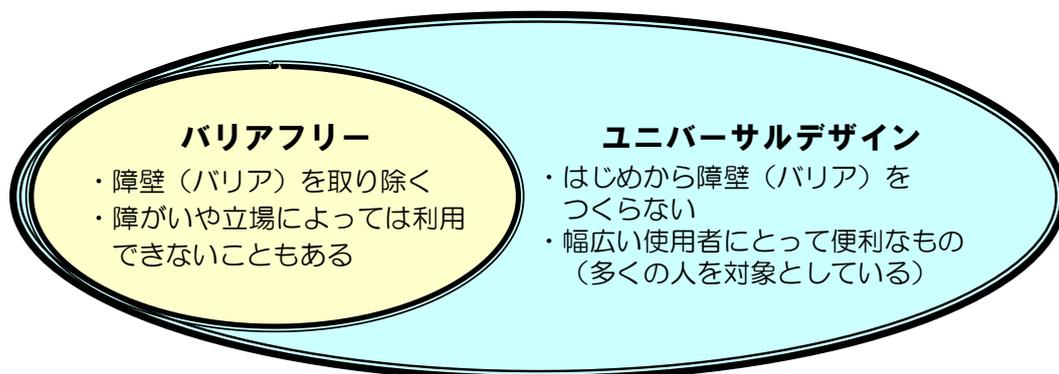
特定の人（主に障がい者や高齢者）が社会生活を送る上で、障壁（バリア）となるものを取り除くこと。

・ ユニバーサルデザイン

年齢・性別・国籍等の違いに関係なく、全ての人を考慮して計画・実施することにより、障壁（バリア）をつくらないことを目標とすること。

商品デザインや商品特性を指す言葉ではなく、「人とモノや空間、サービスとの関係性そのもの」を指す「考え方」を言う。

バリアフリーとユニバーサルデザインの関係イメージ図



ユニバーサルデザインとバリアフリーのどちらの考え方も「誰もが快適で自由に活動できる社会」を目指しているが、ユニバーサルデザインは、対象となる人を限定することなく様々な人に向けられている分、バリアフリーより一歩進んだ考え方と言える。

ユニバーサルデザインの7つの原則

ユニバーサルデザイン7原則とは、故ロナルド・メイス氏を中心に、建築家や工業デザイナー、技術者、環境デザイン研究者などからなるグループが協力してまとめたもので、ユニバーサルデザインを理解するうえで基本となる考え方。

① 公平性（誰もが公平に扱えること）

誰にでも利用できるように作られており、かつ、容易に入手できること。

例) 自動ドア, ノンステップバス

② 自由度・柔軟性（使う上で自由度が高いこと）

使う人の様々な好みや能力に合うように作られていること。

例) タッチパネルと押ボタンがあるATM, 左右どちらの手でも使えるはさみ

③ 単純性（使い方が単純ですぐ分かること）

使う人の経験や知識, 言語能力, 集中力に関係なく, 使い方が分かりやすく作られていること

例) シャンプーとリンスを区別するためのボトルの凹凸

④ 明確性（必要な情報がすぐに理解できること）

使用状況や, 使う人の視覚・聴覚などの感覚能力に関係なく, 必要な情報が効果的に伝わるように作られていること

例) 非常口やトイレ（男女別）の絵文字

⑤ 安全性（うっかりミスや危険につながらないデザインであること）

うっかりしたり, 意図しない行動が, 危険や思わぬ結果につながらないように作られていること

例) パソコンの「元に戻す」ボタン, 扉を開けると停止する電子レンジ

⑥ 低負担（無理な姿勢をとることなく, 少ない力でも楽に使用できること）

効率よく, 気持ちよく, 疲れないで使えるように作られていること

例) 商品を取り出しやすい自動販売機, タッチセンサー付きの照明器具

⑦ ゆとり（操作しやすいスペース等を確保すること）

どんな体格, 姿勢, 移動能力の人にも, 操作しやすいスペースや大きさ, 高さ等に配慮して作られていること

例) 料金投入口の大きな自動販売機, ボタンの大きなりモコン・電話